

# I. 2019年度の総括

岐生研事務局長 佐藤真

## 1. 2019年度：岐生研の研究・組織活動について

### (1) 研究面

岐生研として、例年通り、春に1回、秋に1回の学習会を持つことができました。春も秋も、中学校の若い先生の実践でした。今年も、春は「東濃サークル→可茂サークル」、秋は「岐阜・西濃サークル」で実践を積み上げる所からレポーターをフォローしていく取組ができました。

春は、学校の体制の中で発達障害の子に振り回されながら、何とか、お互いに思いやって助け合えるクラスにしようともがいた実践でした。忙しくてなかなかサークルにも参加できず、アドバイスも日常的にはもらえない中での実践であったので、学習会の中で出た意見を、レポーター自身が今後どう消化していけるのか、ということも踏まえながら論議ができたと思います。

秋は、対照的に、岐生研の仲間が学年主任という条件の中での実践でした。やはり、身近な所（この場合は特に同じ学年）に心強い味方がいるというのは、実践する上で心理的にもかなり違うのではないかと思います。レポーターは、それだけではなく、自分自身も学校体制の様々なことについて疑問を持つ目を持ち、日常的に問題意識を持ちながら実践していきました。学年主任の存在はそのような実践を安心してできるための一つの大きな要素だったのだと考えられます。レポーターの感性は、岐阜県の中学校（小学校も）の中でともすれば麻痺してしまっている岐生研会員にとっても、本来の教育について思い出させてくれるものになったかもしれません。

中濃サークルでは、若い実践家が毎回レポートを持参し、地区セミナーでは入門講座でレポートについて藤井先生から直接アドバイスを受けることもできました。それ以外にも、ベテランを含め、多くの会員がサークルの中で実践を語ったりレポートしたりすることができました。これは、後にも触れますが、県内の多くの地区でサークルが定期的に行われるようになったことと無関係ではありません。

また、岐阜大会（全国大会）の基調の中で、岐生研の仲間のレポートが取り上げられたことは特記すべきことです。「毎年ずっとレポートを書き続けている（今年度で言えば、転勤したばかりでうまくいかないことも、そのまま）からこそ」のことだと言えます。自分自身の実践（とりあえず、やったこと、起こったことなど）を、こまめに日記のように記録していくこと、そして、できればそれをサークルの中で出し合っていくことの大切さにもつながるのではないかと思います。

岐生研の学習会では、講座を設けて学ぶことも行っていますが、今年度は全国大会を行うということもあり、春・秋以外にも行いました。そもそも学習会は、日頃からの本を読むようなことやサークル活動だけではできない学習を補ってくれます。みんなで集まってセレモニー的なことを行うことは、自分自身が学級や学校などで行う活動のイメージを広げることにもつながります。また、自分や自分たちだけでは呼べないような講師を呼んだり、多くの人々の知恵で学習を深めたりすることができます。

昨年度（3月30日）の渡辺雅之先生の学習会に続き、上森さくら先生（6月16日）の「たまには理論的なことも学んでみない？」という講座、藤井啓之先生（7月28日）の基調提案学習会。上森先生の学習会は、バーベキューと抱き合わせで、藤井先生の学習会は、愛生研と共催で行いました。ここ数年行っていなかった夏の全国大会に向けて基調提案の学習ができたことはとても意味のあることです。また、全国大会に参加したり、大会をつくりあげたりしようとしている若い先生も含めて開催し、学習したり楽しめたりしたことは、今後の岐生研にとっての財産になったといえるでしょう。